

種田山頭火の俳句の言葉 ——「行乞記一」の俳句の語句分析を通して——

Words from Santoka Taneda's Haiku: Through a Phrase Analysis of the Haiku in “Gyokotuki 1”

城 重幸

Shigeyuki Jyo

はじめに

種田山頭火（1882年12月3日－1940年10月11日）は、日本の自由律俳句の俳人である。山口県佐波郡（現在の防府市）に生まれ、各地を放浪しながら1万2000余りの句を詠んでいる。

この種田山頭火（以後、山頭火で表記）ブームが、昭和40年代から現在迄続いている。

その間、高藤武馬は、「ブームの底流は、脈々として絶えることなく、断続的に山頭火に対する研究として芽を吹き続けている。その研究は、彼の特異な境涯からして当然のことながら、『山頭火における人間の研究』ともいうべき内容のものであった。」¹⁾と、また、土岐善磨は「人間を超脱した境涯の作品のごとくであって、そのことがかえって一層強く人間的体臭を発散させている。」²⁾と山頭火の生涯と結びつけて山頭火の俳句を評している。他の多くの山頭火研究者や批評家も、やはり山頭火の数奇な人生と結びつけて、山頭火の俳句を論じている。筆者もその論評に全く同感である。

ところで、山頭火は、44歳（1925年3月5日）の時、妻子を捨てて、熊本市北区植木町の味取観音堂の堂守となり、そこに安住の地を見出したかのように思えたが、結局、味取観音堂に安住できなかった。翌年4月10日、これまで書き留めていた俳句を全て焼き払い灰にして、放浪の第一歩を踏み出したのである。

しかし、俳句を作らないではいけない、書かずにはおれない山頭火は、毎日毎日まるで日記でも書くように俳句を作り、「行乞記」と題して綴っているのである。

本稿では、山頭火の体表的な俳句集「行乞記一」の俳句に使われている言葉を抽出・分析し、言葉の面からアプローチして、山頭火の俳句の魅力を明らかにすることとする。

研究の方法

仮説

山頭火の俳句が魅力的で味わいやすいのは、自由律俳句であるにも関わらずリズムを生み出す工夫をしていることと誰にでも分かる平易な言葉を使っているからである。

研究の方法

「行乞記一」の俳句に最初から順に番号をつけ、その全ての句の言葉を抽出し、次の2点から検討する。

- ① 5、7、5の定型句ではないのに、どのようにしてリズムを生み出しているのか。
- ② 一つ一つの句の中の言葉の使い方をどのようにしているのか。

結果と検討

「行乞記一」に使われている言葉の数

「行乞記一」の俳句数は724句で、それに使用されている言葉は、助詞・助動詞・副詞を除いて、表1の通り3478語である。

表1 言葉の数

言葉の数				
名詞	動詞	形容詞	形容動詞	計
1864	1288	309	17	3478

俳句のリズムについての結果と検討

山頭火は、リズムを生み出すために表2～表5のような工夫をしていることが分かった。以下、それを項目ごとに検討する。

1語の中に同音の繰り返しのある言葉の使用について

表2の通り、1語の中に同音の繰り返しのある言葉を32回使っている。(表中の言葉の後の数字は使用回数、数字がないのは1回使用。以降の表についてもこの表記とする) 使用例として90番目(「行乞記一」

表2 1語の中に同音の繰り返しのある言葉

1語の中に同音の繰り返しのある言葉 32			
副詞 19		擬音語 8	名詞 5
しみじみ4	かれがれ	しくしく	つくつくぼうし3
ごみごみ	いよいよ	ぼこぼこ	かなかな
ゆうゆう	をりをり	ほろほろ	へのへのもへじ
だんだん	とうとう	ひょろひょろ	
ひえひえ	ふかぶか	よろよろ	
ほそぼそ	いつまでもいつまでも	ぼりぼり	
ながなが	ただただ	ちらちら	
こまごま	またまた	ぼうぼう	

の句に、筆者が付けた句の順番の数字、以降この標記に統一)「殺した虫をしみじみ見てゐる」³⁾の「しみじみ」のように1語の中に同音の繰り返しのある副詞を19回使っている。また、311番目「休む外ない雨のひよろひよろコスモス」³⁾の「ひよろひよろ」のように同音の繰り返しのある擬音(態)語を8回使っている。更に15番目「こゝで泊らうつくつくぼうし」³⁾の中の「つくつく」のように1語の中に同音の繰り返しのある名詞を5回使っている。

このように、山頭火は、「5、7、5（17音）」が生み出すリズムの代わりに、1語の中に同音の繰り返しのある言葉を使うことによって、リズムを醸し出しているのである。

1語の中に連続音のある言葉の使用について

表3のように山頭火は、一つの言葉に連続音を含んでいる言葉を113回使っている。

使用例として385番目「夜半の雨がトタン屋根をたゝいていつた」³⁾の「たた」のように動詞の語幹に連続音がある言葉を24回使っている。

また、291番目「しぐるゝやみんな濡れてゐる」³⁾の「るる」のように動詞の語尾の連続音を41回使っている。

さらに、30番目「旅のすゝきのいつ穂にでたか」³⁾の「すす」のように名詞の中に連続音のある言葉を15回使っている。他の接続助詞、代名詞、副詞、擬音語も含めると、1語の中に連続音のある言葉を多用している。

表4 同語反復

このように、山頭火は、1語の中に連続音のある言葉を使うことにより、リズムを生み出しているのである。

同語反復の使用について

同語反復とは、同じ言葉を1句の中で2回以上使うことであるが、表4の通り山頭火は、これを92回使っている。使用例として208番目「しみじみ食べる飯ばかりの飯である」の「飯」のように同じ名詞を25回使用している。

また、265番目「穿いて下さいといふ草鞋を穿いて」³⁾の「穿く」のように同じ動詞を21回使用している。

同様に、261番目「草鞋かろく別れの言葉もかろく」³⁾の「かろく＝軽く」のように同じ形容詞を9回使用している。

更に、59番目「露でびつしより汗でびつしより」³⁾の「びつしより」のように擬音語を2回使用している。

それ以外に、表4にあるように、代名詞、数詞、接続助詞、副詞、助詞を含めると、同語反復を92回用いている。

一般的には、17音という制限された中で俳句を作ることから、17音の中に同じ言葉を繰り返し使うことは、極力しないものであるが、山頭火は、そんなことには頓着せず、同語反復を使うことによって、リズムを生み出しているのである。

表3 1語の中に連続音のある言葉

1語に連続音のある言葉 113					
動詞の語幹24		動詞の語尾41		名詞15	接続助詞14
ささ	ひび	るる	17	たた	7
つつ	2	たた	4	たた	22
すす	5	てて	5		
つつ	8	かが	2	らら	2
蝶々	2	副詞	11		
すす	すす	擬音語	2	人々	まま
11					
かか	ただ	ちち		代名詞	6
ほほ	2	くぐ	ここ	ここ	6

同語反復 92			
名詞25	代名詞4	動詞21	形容詞9
石3	我2	逢う	大きい2
犬2	こんな	溢れる	寒い2
岩2	その	ある2	無い2
唄	数詞7	歩く	長い
音	—4	いる3	良い
顔2	一人3	動く	軽い
影	擬音語2	拝む	助詞18
霧	ざくり	枯れる	が
銚	びつしより	刻む	と2
砂	接続助詞2	過ぎる	の4
蝶々	ても	散る	は2
土	ば	着く	へ
露	副詞4	続ける	も7
墓2	だけ	泣く	たり
水	まま2	成る2	
飯	また	寝る2	
山2			
明日			

押韻の使用について

表5の通り、山頭火は、押韻（頭韻と脚韻）を170回使っている。

使用例として、32番目「ありがたや熱い湯のあふるゝにまかせ」³⁾は、「ア」を頭韻として使っている。また、83番目「お経あげてお米もらうて百舌鳥ないて」³⁾と「オ」の頭韻と「テ」の脚韻を使っている。

このように、押韻（頭韻と脚韻）を使うことによって、山頭火は、リズムを生み出しているのである。

山頭火の俳句のリズムに関して

山頭火は、リズムを重んじる「5、7、5（17音）」の定型句の型を破ることによって生じるマイナスを、1語の中に同音の繰り返しのある言葉や1語の中に連続音のある言葉、そして同語反復、それに押韻を使うことにより、マイナスを克服しているのである。これらにより、山頭火の俳句は、読み手にリズムを強く印象づけ、結果として読み手の心をうつものとなっているのである。

読み手の心に残る言葉についての結果と検討

山頭火は、表6～表8に表れているように、ごく平易な言葉を使って句作していることが、分かった。

以下、それらについて検討する。

存在を表す言葉の使用について

表6の「いる」、「ある」等のように、存在を表す言葉を255回用いている。

これは、山頭火が常に自分の存在を自然界の中に見出しているからである。例えば、68番目「笠の蝗の病んでゐる」³⁾、133番目「竹を眺めつゝ尿してゐる」³⁾等の「ゐる」や166番目「何とたくさん墓がある墓がある」³⁾の「ある」のように、山頭火は、生きているそのままの世界を言葉として射止めて句作しているのである。つまり、山頭火は、心に感じたこと、心に映じたことを言葉にして、そのまま句にしているのである。

このように、山頭火は、何の飾り気もなく見たまま感じたままを吐き出しているのです、山頭火の俳句は読み手の心を打つのである。

酒に関する言葉の使用について

表6のように、酒に関する言葉を88回使っている。山頭火は、とにかく酒にはだらしない。飲まずにはおられない山頭火がそこにいる。そんな自分をそのまま句にしている。例えば、128番目「酔うてこほろぎといっしょに寝てゐたよ」³⁾となる。酒から離れられないでそれに振り回されること

表5 押韻使用の句数

押韻の使用の句数 170							
頭韻の句数 106				脚韻の句数 64			
アの句24	イの句4	ウの句1	オの句8	カの句15	カの句4	キの句1	クの句3
キの句1	コの句6	サの句1	シの句3	スの句1	ツの句2	テの句11	トの句3
ソの句2	タの句3	トの句2	ナの句4	ニの句1	ナの句3	ノの句15	ハの句2
ネの句1	ハの句3	ヒの句2	フの句7	ホの句4	フの句1	ヘの句1	ヘの句1
マの句3	ミの句1	ムの句1	メの句1	モの句1	りの句2	ルの句10	ヨの句1
ユの句1	ヨの句2	ワの句2	ヰの句1		ヲの句2	イルの句1	ナイの句1

表6 句の対象1

句の対象1										
存在255	酒に関すること88			暮らしに関すること138				生死に関すること49		
いる141	酒33	尿23	水32	食べる29	食べ物54		寝る32	銭23	墓12	生死
ある47	飲む13		水31	食べる19	弁当8	南瓜	寝る21	銭9	土10	南無観世音 毒薬
する37	酒9		悪水	うまい3	米6	茄子	寝床4	一銭12	死3	カルもチン 焼き場
ござる	酔う6			下さる	お茶6	鯛2	夢5	三銭	地藏3	生き残る 鐘
おる	酔い覚め5			すする	飯4	冬瓜	布団	五十銭	石塔3	仏
				味わう	大根3	山芋	寝言		彼岸花2	寺
				おいしい	河豚5	御飯			病む2	マリア
				よばれる	蕎麦2	汁			葬式	生きる
					林檎2	紫蘇の実				
					柚2	赤い魚				
					餅2	胡椒				
					駄菓子2					

の多い自分の煩悩を嫌悪しながらもどこかで報われるところがあるのである。酒について書きとめる言葉の行先は、自分という存在の哀しみである。

酒を飲めば尿となって出るし、水が欲しくなる。山頭火は、そんなだらしなさをそのまま、401番目「尿してゐる朝の山どつしりとすはつてゐる」³⁾のように詠んでいる。酒を飲むから、水をたくさん飲む。だから当然尿となって出る。349番目「水飲んで尿して去る」は、まさに大酒飲みの山頭火自身の日常を表出している。つまり、酒に関する山頭火の俳句には、山頭火の酒に対するありのままの生き様が、滲み出ているのである。要するに、山頭火は、飾り気や見得もないありのままの自分を言葉にして曝け出しているのである。だから、山頭火の俳句は、読み手の心を捉えて離さないものである。

日常の暮らしに関する言葉の使用について

表6のように、身の回りにある暮らしに関する言葉を138回使っている。

まず、目につくのが、食に関する言葉で、331番目「飯のうまさもひとりかみしめて」³⁾のように、生活のど真ん中の食について句を詠んでいる。これらの俳句から読み手に伝わって来るものは、食べるということの切なさであり、人間の存在の哀しさである。山頭火は、このように食に対する自分のあり様と心模様を句にして、吐き出すが如く詠んでいるので、山頭火の俳句は、読み手の心に響くのである。

次に、山頭火らしいのは、「寝る」を38回使っていることである。例えば、259番目「落葉しいて寝て樹洩れ日のしづか」³⁾のように、疲れれば寝る。ただそれだけのあるがままの自分の姿があるがままの言葉で句にしている。

「銭」も、23回使っている。60番目の「投げ与へられた一銭のひかりだ」³⁾と詠む山頭火は、金銭

への欲を捨て、あるがままに生きている。山頭火にとって、「銭」つまり一銭は、ありのままの現実なのである。このお金にこだわらない山頭火の生き方が、読み手の心を捉えて離さないのである。

生死を感じさせる言葉は29回使っている。例えば、2番目「青葉に寝ころぶや死を感じつゝ」³⁾と詠む山頭火は、生きていることは、死に向かっていると感じながら生きている。それを感じさせてくれるのが、山頭火の身の回りにある自然そのものである。153番目「松風ふいて墓ばかり」³⁾と、自然を言葉にして詠むことは、山頭火自身の生き様を詠むことに他ならない。生きているからいつかは死が訪れると当たり前のことを、当り前のこととして受け入れて、山頭火は淡々と句にして詠んでいるので、読み手の心をそそるのである。

人間を表す言葉の使用について

表7のように山頭火の人を見る目は、まるで自分自身をその中に見出していると言ってもいいように、下層階級の人や弱い女性・子供、それに外国の人に向いている。自分をそれらの人に投影しているのである。

1) 下層の人を詠んでいる28句について

山頭火は、行乞の中で世間のいろんな人と行き合わせるが、視線はいつも下層の人たちに注がれている。その人たちを見る目には、冷たいものがあるが、その視線の奥には自分自身の姿を重ねているので、「きちがい」「片輪」「馬鹿」「ルンペン」「メクラ」「ホイトウ」等の問題語を使っている、読み手の心をひくのである。257番目「ホイトウとよばれる村のしぐれかな」³⁾と、見たまま感じたままありのままの人間を捉えて、句として表現しているのである。

2) 子どもを詠んでいる25句について

159番目「泣く子叱つてる夕やみ」³⁾は、子どもは泣きわめき、困った存在、扱い難い存在であると捉えている。一方、141番目「旅の子供は夕べしく―泣いてゐる」³⁾と、子供は、どうしても気になる存在でもある。山頭火は、時には温かく、時には冷たく子供を見ているのであるが、その接し方は、誰もが持っている接し方なので、読み手を同感させるのである。

3) 女を詠んでいる23句について

62番目「秋暑い窓の女はきちがひか」³⁾と、女を蔑むように見ているし、一方では、478番目「風の街の朝鮮女の衣裳うつくしい」³⁾と、時には女の美しさにハッとするのである。この見たまま心のままの言葉による表現が、読み手の心をうつのである。

4) 外国人を詠んでいる13句について

395番目「支那人が越えてゆく山の枯すゝき」³⁾のように、日本の市井の荒波から外れている外国人への冷たい視線や憐れみとともとれる感情が読み取れる。当時の日本人なら誰もが抱いたであろう偽りのない外国人への心情の吐露が、読み手を引きつけるのである。

表7 句の対象2

句の対象2				
人間88				
下層階級28		子供25	女23	外人13
片輪4	盗人	子供10	女16	支那人9
きちがい4	馬鹿	児6	少女	鮮人2
爺さん4	メクラ	子6	女房	朝鮮女
同志3	病人	孤児2	朝鮮女	西洋人
ルンペン2	虚無僧	孫	男と女4	
ホイトウ	お遍路			
坊主2				

自然の言葉の使用について

山頭火は、漂泊行乞の旅をしていて、眠たくなればどこでも寝、食べたくなれば食べ、歩きたくなれば歩くという何にもこだわらない自由な生活をしている。そんな中、目に止まり心に映ずるものは、身の回りの自然である。山頭火は、表8にあるように、見たまま感じたまま、言葉にして吐き出す如く句にしているのである。

表8 句の対象3

句の対象3										
花57		草葉101	虫49		鳥32		家畜43	魚12	気候138	山道65
小菊11	鳳仙花	雑草16	虱8	かなかな	鶏7	目白	猫15	魚10	時雨23	山40
花11	枇杷花	草19	蝶々5	蟻	鴉4	頬白	犬10	蟹2	風26	山28
菊4	蔦の薔	枯草12	コウロギ4	蓑虫	百舌鳥4	鶯	馬7		雨40	山路5
山茶花4	芙蓉	枯れ13	蜻蛉3	蟬	水鳥2	燕	牛5		天気6	山家3
椿3	薊	葉21	赤蜻蛉2	虫の声	小鳥2	鶺鴒	蚕3		霧3	山々2
萩2	花イバラ	紅葉16	蠅2	芋虫	鳥2	かつこう	豚3		雲6	不二の山
彼岸花2	カラタチ	葛2	螢2	カマキリ	鳥	みそさざい			小春日	道25
竜胆2	ミソハギ	烏瓜2	蚊2	小蜘蛛	雀	ほととぎす			霜7	道19
茶花2	べんべん草		蚤2		きつつき				空18	山路5
金鳳花2	たんぽぽ2		つくつく法師11						露3	道べり
水仙2	浜なでしこ								晴れ5	

1) 花を詠んでいる58句について

138番目「ゆつくり歩かう萩がこぼれる」³⁾、115番目「誰もゐないでコスモスそよいでゐる」³⁾と、豪華に仕立てられた花ではなく、むしろ、野山に咲く花やポツンと咲く花に目や心を奪われて、そのことを当たり前のように、句にしている。

2) 草や葉を詠んでいる101句について

420番目「山の紅葉へ胸いつぱいの声」³⁾、505番目「落葉拾ふてはひとり遊んでゐる」³⁾、380番目「枯草山に夕日がいつぱい」³⁾、301番目「ゆきへて倒れるまでの道の草」³⁾、709番目「大地あたゝかに草枯れてゐる」³⁾と、「紅葉」、「落葉」、「枯草」等の減び行く草や葉に自ずと山頭火の心が向かっている。山頭火は、今の自身の姿を、草や葉に投影して、句に詠んでいるのである。

3) 虫を詠んでいる49句について

24番目「かなへないてひとりである」³⁾、48番目「死にそこなつて虫を聴いてゐる」³⁾等のように、虫を詠んでいる句が多い。中でも、蟬、蓑虫、つくつくぼうし、蜻蛉、赤蜻蛉、蜘蛛、芋虫、蚤、虱など、至って身近な虫たちを、慈しみの心をもって見ているし、虫たちが本能のままに鳴いたり動いたりする様に関心入っている。そこを山頭火は端的に捉えて、自分もそうありたいと、俳句に詠んでいるのである。

このように、山頭火は、虫への心のあり様を素直に言葉にして吐き出しているのも、山頭火の俳

句は読み手の心を捉えるのである。

4) 鳥を詠んでいる39句について

山頭火は、鶏、鴉、百舌鳥、雀、鶉、鴨、水鳥、小鳥などのある瞬間を捉えて、498番目「鳴きかはしてはよりそふ家鴨」³⁾、330番目「百舌鳥ないてパツと明るうなる」³⁾と詠んでいる。俳人が良く詠む鶯や郭公ではなく、ごく身近な鳥たちを聴覚や視覚等の五感を使って鳥の様を瞬時に捉えている。あたかも、山頭火自身が、鳥に同化しているかのように。それが、読み手の心に響くのである。

5) 気象現象を詠んでいる138句について

292番目「さんざしぐれの山越えてまた山」³⁾と山頭火は、時雨の中に身を置き、時雨に同化して、自ずと淋しさ、侘しさ、哀しさを感じ取っている。このように山頭火の句の根底には哀感が漂っているの、読み手は、つい句の中に入り込むのである。

また、153番目「松風ふいて墓ばかり」³⁾と、風は季節の移ろいを感じさせる。その風と共に歩き続けているのが、山頭火自身である。一見、素直に風を捉えているが、この心の奥には、山頭火自身の存在がまるで風のようなことを暗示しているのである。風は寒い、冷たい、さみしい、悲しいと自分の身を風に例えているのである。そんな山頭火の心の変化が、読み手の心を揺さぶるのである。

更に、山頭火は、雨や雪が降ろうが歩き、霜や露が降りようが歩き、勿論晴れの中でも歩く。漂泊の旅だから、無理してこんな中を歩かなくても良いのに、山頭火は、自然にとり憑かれてでもいいのかのようにただただ歩いている。そんな山頭火の歩く姿が、読み手の脳裏に浮かんで来る。

このようにあるがままの自分の姿を、言葉にして素直に吐き出しているの、読み手の心に届くのである。

6) 山や道を詠んでいる65句について

232番目「行手けふも高い山が立つてゐる」³⁾のように、自ずと山に惹かれるのが山頭火である。山頭火は、常に自分の人生の山を越えたいと思っているので、山頭火の山を見る目は優しいし、そこには山への親しみさえ感じられる。

同様に、山頭火にとって「道」は歩く道であるとともに「人生の道」でもある。それも何となく死を思わせる道である。具体例をあげると、706番目「道はでこぼこの明暗」³⁾など自分の生きる道を、実際の歩く道に見出している。

この繊細な感覚が、山頭火の句作の原点である。この原点に、読み手は心を動かされるのである。

7) 自然に関する言葉について

山頭火は、流転行乞の旅に出て、自然と共にあるがままに生きようとしている。その山頭火の生き方というのは、愚の生き方、即ち、金もない、物もない、欲もない生き方である。山頭火は、自分自身の生き方を、純粹無垢な心で、ただただ見たまま聞いたまま感じたまま吐き出すように俳句にしているのである。従って、山頭火が、俳句に使っている言葉には、飾り気もなければ誇張もなく、日常生活の中にある平易な言葉ばかりである。換言するならば、他の著名な俳句作家のような光る言葉は一切使わず、身の回りにあるもの、否、むしろ見逃されているものや嫌われているもの

の中に自分自身の真実を見出し、自然に関する言葉を句にして紡いでいるのである。それにより、当然の結果として、それらの言葉が、読み手の心に浸み入るのである。

まとめ

俳句のリズムを生み出す工夫について

山頭火は、芭蕉や子規が大切にした自ずとリズム感のある「5、7、5（17音）」の定型句を脱して、自由律の俳句を詠むことに専心するが、それでも、リズムを生み出すため、俳句の中に、1語の中に同音の繰り返しのある言葉や1語の中に連続音のある言葉、そして同語反復、それに押韻（頭韻・脚韻）を使用することによって、山頭火ならではのリズムのある俳句を生み出していることが、分かった。これが山頭火の俳句の魅力となっている。

俳句に使う言葉の特徴について

山頭火の俳句には、華やかな言葉は一切使われていない。それどころか、俳人だったら決して使わない「きちがい」、「尿」、「墓」、「死」、「枯れ…」等のマイナスイメージの言葉を何の躊躇もなく使っていることが分かった。この山頭火の心の中の真実の言葉に、読み手は惹かれるのである。

また、山頭火は、身の周りのものや自然の中の誰もが目にする草花や生物の中に自分自身を見出し、自分を投影して、見たまま感じたままを言葉にして句として吐き出していることが分かった。そんな言葉の数々が、山頭火の俳句の魅力となっているのである。

山頭火の俳句の魅力について

山頭火自身が「行乞記一」の11月16日に、「見たまま、聞いたまま、感じたままの 野衲、山頭火」³⁾と記しているように、山頭火は、見たもの、聞いたもの、感じたものを心に留めて、それをそのまま言葉にし、句として吐き出している。一例を挙げると、44番目「朝焼け蜘蛛のいとなみのいそがしさ」³⁾の「朝焼け（4音）」のように見たまを字足らずにして発句に吐き出し、「蜘蛛のいとなみの（8音）いそがしさ」と、字余りにすることによって、山頭火自身の朝の旅立ちのせわしさを蜘蛛の営みに投影している。

このように、山頭火は、自然や物や生物の中に自分を投影し、誰に遠慮も気兼ねもなく、自分の心眼に映ずるものをそのままに吐き出しているのである。つまり、山頭火の俳句は、山頭火の生き方そのもの・人生そのものなのである。

従って、読み手が、山頭火の俳句に接すると、山頭火の俳句を繰り返し読むうちにいつのまにか山頭火の俳句を暗唱してしまい、その上で、山頭火の俳句の中に読み手の心の隅にあるものや「山頭火のようにありのまま素直に生きていけたらいいな」という願望までも見出すことになるのである。

山頭火の俳句が、読み手を魅了してやまないのは、山頭火自身の生き方や心を、気候や動植物等を含めた自然に投影して、難しい言葉を使わずに、ありのまま飾らずに俳句という短詩形にして吐き出すように詠っているからである。

尚、この山頭火の作句の特徴は、他の「草木塔」や「其中日記」等に記されている全ての俳句にも共通して言えることであることを最後に付記しておく。

引用文献

- 1) 大山澄太・高藤武馬(編). (1980). *山頭火(研究と資料)* (P.276). 春陽堂.
- 2) 大山澄太・高藤武馬(編). (1980). *山頭火(研究と資料)* (P.47). 春陽堂.
- 3) 種田山頭火. (1979). *あの山越えて 行乞記一*. 春陽堂.